

須田勉教授の定年退職にあたって

考古・日本史学専攻主任 勝田政治

二〇一六（平成二八）年三月、本学文学部史学地理学科考古・日本史学専攻教授 須田勉先生が定年退職されます。お元気で旺盛なる熱意をもって日々、教育に研究に励んでおられるにもかかわらず、大学の規定により去らねばならないことになりました。退職にあたりまして専攻主任という立場から、一言挨拶を述べさせていただきます。

須田先生は、敗戦の年である一九四五（昭和二〇）年に埼玉県飯能市にお生まれになり、早稲田大学教育学部を卒業された後、千葉県教育庁に就職されました。その後、千葉県市原市教育委員会を経て、一九八八（昭和六三）年に文化庁文化財保護部記念物課の文化財調査官となられ、一九九五（平成七）年に文学部国史学専攻（現考古・日本史学専攻）の考古学担当の助教として赴任されました（ちなみに筆者も同年に教養部に赴任しており、本学では同期となります）。以後、教授を経て二十一年間にわたって、学部・大学院の教育と運営に多大なる貢献をなされ、定年を迎えることになりました。

須田先生のご専門は考古学でありまして、後掲の「須田勉先生主要業績目録」に示されているように膨大な著書や論文を著されています。こうした研究業績から二〇一二（平成二四）年、早稲田大学から博士（文学）の学位を授与されています。須田先生の学問は、博士学位論文を基にした代表的著作である、「日本古代の寺院・官衙造営―長屋王政権の国家構想―」（吉川弘文館）にみられるように、寺院や官衙の造営問題から当時の国家構想を浮き

彫りにする、という壮大なスケールを持つています。具体的には、下野薬師寺・筑紫観世音寺などの寺院や多賀城・大宰府などの官衙の造営や造営促進が行なわれた年代を考古学の手法で分析して、八世紀前期の「長屋王政権」時代であることを確定し、そうした造営事業は同政権の律令国家確立をめざした地方政策であった、ことを明らかにされています。

研究の基盤である下野薬師寺（栃木県下野市）の発掘調査は、須田先生が担当された「考古学実習」という教育の現場でもあります。本専攻の考古学コースは、春と夏の長期休暇期間中に集中的に実施する「考古学実習」という、他の大学にはあまりみられない実習授業を設けています。寝食を共にする合宿形式での発掘調査であり、須田先生は毎年陣頭指揮をとり、絆を深めながら学生を導かれ、その授業をとおして多くの卒業生を、考古学の職場に送り込んでくれました。さらに、博物館学芸員資格のカリキュラムでも中心的な役割を果たされてきました。また、大学院にもゼミ生を毎年のように進学させて自ら指導にあたられ、何人もの論文博士を世に出してくれました。

こうした研究・教育活動とともに須田先生は、学会や文化行政の面においても八面六臂の活躍をされています。学会では、考古学分野では最大規模である日本考古学協会の副会長をはじめとし、東国古代遺跡研究会の会長、房総歴史考古学研究会の代表などを務められてきました。文化行政では、文部科学省の文化審議会委員をはじめ、埼玉県文化財保護審議会の会長、飯能市文化財保護審議会の委員、埼玉県立歴史と民俗の博物館運営協議会の会長などを歴任され、関東地方各地の史跡整備委員会の委員長・副委員長・委員を務められてきました（煩雑となるのですべての役職を記すことは割愛します）。

須田先生の学生に向ける熱意を受け継ぐことをお約束しながら、拙い挨拶を終えたいと思います。須田さん、長い間ご苦労さまでした。そして、ありがとうございました。